

世界で一番遺伝子組み換え食品を 食べているのは日本人



モンサント社と同社の遺伝子組み換え作物や農薬に反対するデモ「マーチ・アゲインスト・モンサント」が5月23日、米国、アフリカ、欧州にまたがる40か国以上の約400都市で一斉に行われ、大勢の人たちが街頭に繰り出した。このデモは今年で3回目。スイスではバーゼルやモルジュでデモがあり、約2500人が参加した。また、パリでは、グリーンピースをはじめとする環境保護団体や、環大西洋自由貿易地域(TAFTA)に反対する運動など約3000人が集結し、モンサントの除草剤「ラウンドアップ」などに抗議の声を上げた。

世界保健機関(WHO)は先日、ラウンドアップの主成分に「発がん性の恐れがある」とする報告書を発表している。

知らぬ間にGM食品を食べている日本人

こんなにも世界規模のデモで社会問題となっているにもかかわらず、日本では、全くこの問題はメディアでは取り扱われず、報道もされていない。そのため、日本人は遺伝子組み換えについて知らないし、知ろうという関心も薄い。その理由の一つに日本ではGMの非表示が可能なため食品メーカーが情報公開しないことがあげられる。

日本では加工品32分類に対して遺伝子組み換え食品の表示義務があるが、混入上限(混入閾値)は5%まで許されており、しかも加工によって検出できないことを理由に食用油や醤油などは表示義務から除外されている。さらに使用材料の重量比が4番目以下であればこれもまた表示義務がないというザル規制だ。

結果、知らぬ間に多くのGM食品が日本人の口に入っている。「世界で日本人が一番GM作物を食べている」※という報告があるにも関わらず、日本人の多くはその事実を知らない。

※GM作物はトウモロコシ73.6%、大豆84.3%、ナタネ油が89.1%を占める。カップラーメンには、GM由来の食物油脂、醤油、たん白加水分解物、加工でん粉、調味料、カラメル色素、乳化剤、酸化防止剤、ビタミンB2などが使われている。

中国、韓国、台湾は大きく舵を切り始めた！

中国では混入上限が1%と日本よりはるかに厳しいのだが、昨年12月には、遺伝子組み換え食品を含んでいる全ての製品に表示義務があることの方針を打ち出した。台湾では混入上限が5%であったものが、2016年から3%に、さらにはEU並みの0.9%まで引き下げるとしている。

韓国では成分上位5番目までが表示義務対象だったが、主原料でなくても使用されているすべての成分表示を義務付ける制度に変更されている。また、韓国では米韓自由貿易協定(FTA)の発効により、大量の遺伝子組み換え食品が学校給食で使用されることを危惧する世論が高まっている。

NON-GMOの意志表示を

現在、アメリカでは遺伝子組み換えでない商品を選ぶ消費者が多くなっている。NON-GMOという表記が商品の安全性・安心性を訴える最も効果的な表示となっているので、多くのメーカーが遺伝子組み換え作物を使わない商品を販売するようになってきている。

消費者がGM商品を買わないというはっきりした意思表示をすることで、メーカーも消費者が求めている商品を作れなくなる。消費者の無関心がモンサント社をはじめ遺伝子組み換えの推進企業にとっては都合がよく、大手を振って世界市場をリードし、儲けることができるのだ。

騒がない日本、何も知らない日本人は今後TPPや農業改革の格好の市場拡大ターゲットとなる可能性がある。モンサント遺伝子組み換え問題はもはや他人ごとではない。一人でも多くの日本人が世界で何が起きているのか、いかに日本では何も起こらないようにされているのか、知らなければならない時がきている。

(文責：田村 和子)